様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：18530425
研究課題名（和文）　共同性を留保した愛着・しない愛着－‘自発的’居住地選択における地域イメージの位置

研究課題名（英文）　Attachment to 'Place' Free from 'Community' or Coming from 'Community'

研究代表者
菅　康弘（SUGA YASUHIRO）
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：40226410

研究成果の概要（和文）：
本研究では、地域を形づくる共同性と無意識結びつけられてきた　「‘場所’への愛着」を再検討した。すなわち、地域的な共同性と「‘場所’への愛着」との結びつきを一旦留保し、愛着の生成過程における地域イメージ・場所表象を考察することから、改めて愛着と共同性との相互関係のあり方を考えている。具体的には、(1)沖縄に居住地を移したＩターン移住者の移住動機形成過程の言葉を分析し、内面に実存する風景と共同性志向との距離を測り、(2)近現代の流行歌における‘場所’とその風景・感情との言説を分析している。

研究成果の概要（英文）：
Attachment to 'place' has been thought as a part of communality. We have to reconsider the relation between this attachment and regional community, and then investigate where attachment to 'place' will be born and what its figures of 'place' is. To this end, I've interviewed those who moved to Okinawa areas, and have analyzed their vocabularies about the scenery (not only Okinawa but their home) and the process to move Okinawa.　I have also gathered discourses about strong attachment to 'place'　(ex. 'city', 'home', 'suburbia', 'journey' etc).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
総　計	3,600,000	660,000	4,260,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学（3801）
キーワード：沖縄、愛着、Ｉターン移住、風景、地域イメージ、住、旅、ストレンジャー

１．研究開始当初の背景
本研究の主たる対象である「Ｉターン」、すなわち脱都市型の移住は日本の場合１９７０年代から始まっていた。ただ今日とは異なり、この時代はオルターナティブ・カルチャー・ムーブメントの一環として田舎暮らしで

あった。つまり、「高邁な」理想に萌えた「マジメな」、新しいライフスタイルの追求であった。したがって、かれらが移り住んだ先の住民、ネイティブたちにとり、こうしたストレンジャーは、その理想の「高邁さ」ゆえ、理解不可能ながらもその動機は評価されやすい「見知らぬ者」であった。

またこの時代、健康志向の高まりから、家族の喘息やアトピーなどの治療を目的にした移住も数多くあった。さらには「失われた家族の絆の回復」を目指した者もいた。かれらの移住動機はネイティブに理解しやすく評価もしやすいものであった。

しかし、８０年代、特に後半以降出現した「amenity mover」と呼ばれる移住者たちは地域住民・行政担当者にとり、理解しがたく評価もしがたい存在であった。かれらは新しい時代の理想に燃えるのでもなく、明確に判別できる動機を有しているわけではなかった。その「居住地選好（residential preferance)」は極めて個人的色彩が強く、極めてカルイものと考えられ、ある意味で最も理解し難いものであった。

特に今世紀に入り居住地選好主導の移住傾向は強まり、沖縄を中心に移住してきたその「聖地」とでもいうべき場所が沖縄であった。しかし、沖縄の一般住民はさておき、行政担当者やマスコミを始めとする本土からの移住者へのまなざしは、ある意味でそのライフスタイルを持ち上げながら、同時に居住地選択に対するカルイ態度を非難している。

しかし、こうしたネイティブや行政、離れた地平からのまなざしは「動機解釈」に偏っているがゆえの、戸惑いであり一方的な賞賛と非難であり、依然として「住＞旅」「日常＞非日常」「生活＞遊び」という不均等二分法（二分法は本来不均等なものであるが）にもとづくものなのである。だからこそ、マジメ―フマジメ、オモサ―カルサ、理解可能―理解不可能という評価的枠組みがいとも簡単にかぶさってくるのである。そこには移住という選択をめぐる能動的側面をとらえようとする理論的枠組みは不在である。

２．研究の目的

本研究では、Ｉターンという移住行動を、a.　係累のない土地への移住、b.　自発的な移住、c. 地方の小さな集落への移住、とまず定義した。

ただ、 c. に過剰に依拠する伝統的な「離都向村」型の観点は、「失われた人間らしさ」「心身の健康の喪失」といった剥奪的動機に限定される、ある意味でＩターンという社会学的事実がもつ内実を一面化・矮小化させる言説群に支配されがちなものである。そこで、上記の背景を念頭に、本研究では、Ｉターンを移動の一形態と位置づけ、「居住地選択-地域イメージ-愛着」の３項の相互連関性の上にたち、Ｉターン以外の居住地選択（Ｕターン・郊外移住・都市への移動など）との比較を通じ、主として b. に焦点を当て、Ｉターン移住をその自発性の核となる「愛着」という観点から考察した。そして特に、「愛着」の起点や終点に無条件に措定されてきた共同性を留保した上で、

(1)愛着、特に場所への愛着の多面性を明らかにし、

(2)共同性を措定しない愛着の存在が定立しうるのか

(3) 仮に定立するとした場合、そうした愛着がどのような共同性を生むのか・生まないのか

(4)どのようにして共同性を生成するのか・しないのか

という観点から、今日的な「場所」や「地域」の創生の可能性を研究を目的としたものである。

３．研究の方法

本研究は、‘語り’と‘唄い’を素材に、共同性の措定を留保した愛着研究を核とする、〈旅〉と〈住〉、〈漂流〉と〈係留〉からアプローチする文化動態論である。「居住地選択−地域イメージ−愛着」という３項の相互関連を探るため、

(1)Ｉターン移住者自身の言葉を中心に、‘語られた’移住動機からさまざまな愛着の語彙を収集・分析する

（２）近現代の流行歌・大衆音楽を素材に、‘唄われる’場所・愛着の形を分析する

という２点を研究方法の中心に据えた。

こうした‘語られ’‘唄われ’る場所とそこへの愛着から、その多面性を明らかにし、共同性との連関を探った。

(1)では、さまざまな媒体から抽出した沖縄への移住者にコンタクトをとり、詳細なインタビューを実施した。沖縄を選んだ理由は、この地域が２０世紀末以降、観光と移住との双方においてブームを迎えている点にある。すなわち、〈旅〉と〈住〉とのオーバーラップする領域としてのＩターン移住、都市と地域と観光という３領域のコンタクト・ゾーンを重視する本研究において沖縄という場所は最も最適と考えたからである。

具体的には、移住者に移住動機形成過程を詳細に尋ね、さらにかれらをとらえた風景の有無・その場所・季節などを取材した。そして、実際にかれらの移住動機を形成したであろう風景の場所に赴き、多角的に撮影し、かれら自身の言葉と風景との連動性を考察した。

なお、(1)の前提として、１９９０年から始めた「移住者データベース」を引き続き継

続しており、インタビュー対象者の選択、基本的な属性の統計的分析に使用している。

(2)については、本研究は見田宗介の分析した望郷と憧憬の延長線上にあるといってよい（見田宗介、1967、『近代日本の心情の歴史』、講談社)。‘語り’とは異なる‘唄い’の中に数々の心情にあらわれた時代時代の人間の実存性を、インタビューと並行して研究した。見田はこの研究において、望郷と憧憬とを対称的に、しかし「距離」という視点で同形的に扱っている。しかし、見田の研究からはすでに40年近い時が過ぎているし、そこには人々の素朴な共同性への希求が暗黙の前提とされている。本研究の(2)の方法は、見田の提示した愛着の様態を、Ｉターンという具体的なフィールドで、今日的な形で再定式化することを旨としている。

４．研究成果

(1)沖縄移住者の調査について

本研究の１つの柱である沖縄移住者へのインタビューの詳細について報告する前に、沖縄の市町村の移住状況を概観したい。右図にみるように、２０００年前後よりいくら移住ブームとはいえ、すべての地域で人口が増加しているわけではない。やはり離島ややんばるの辺鄙な地域は依然として減少傾向にある。また人口が増加している地域も、仔細にみると、それは那覇都市圏の郊外化の進展の結果とみることも可能である。しかし、他の都道府県と比較すれば、沖縄県における社会増は観光的にも注目を集める地域が多く、極めて独特な状況にあることが推察できるのである。

下記、２００７年〔図書〕②において、まず調査枠組みとして、沖縄移住者の言説を題材に、田舎暮らしを探求する場合の力点の置き方を考察した。すなわち、日本においては１９７０年代に始まったＩターン移住であるが（この言葉が生まれたのは８０年代終わり頃)、主として９０年代終盤からはそれは通常「田舎暮らし」という語られ方をするように変化してきた。しかし、この現象をとらえようとするとき、「地方の小規模自治体への移住」ばかり語ることの危うさを本稿では提示し、むしろ「係累のない土地を」「自発的に選択する」ことから、土地への愛着や、場合によっては土地に対してもつ‘幻想’の積極的意義を問い直している。

ただ、２０００年代に入り活発化する沖縄移住ブームにおいては、その語り口は「田舎暮らし」ではなく、あくまで「沖縄暮らし」である。

〔雑誌論文〕②では、本研究のテーマである「愛着」に焦点を置き、この点をさらに詳細に分析したものである。すなわち、21世紀に入り観光と移住の両面でブームを迎えている沖縄を舞台に、〈旅〉のまなざしと〈住〉のまなざしの接点を探求した。【研究の目的】でも述べたように、Ｉターン移住における研究の焦点は、A.〈田舎〉と呼ばれる、B. 係累のない土地への、C. 自発的な選択を伴う移住であるが、本稿ではまず A. の言説が棄却した。それを受け、B. と C. の今日的な意義が研究されているが、特に C. では巷間に流布する「楽園幻想を批判する」言説に対し、これらがある意味では積極的な意義を内包することが強調されている。それは選択された土地を舞台にした「逆接の連鎖による」愛着である。すなわち、単純に、生まれた「から」とか、長年住んできた「から」といった順接の累積による愛着とは異なる、常に否定を内包した愛着であり、こうした愛着の居場所があることこそ、今後の地域創造においては極めて重要であることを指摘している。

この２つの稿で提示された枠組みをもとに、本研究では、沖縄本島の名護・本部・大

沖縄県の人口推移(2001年-2006年)

	2006年	2001年	増減	増加率
県計	1,363,541	1,324,147	39,394	3.0%
那覇市	312,830	301,300	11,530	3.8%
宜野湾市	90,001	86,901	3,100	3.6%
石垣市	45,363	43,463	1,900	4.4%
浦添市	106,325	103,543	2,782	2.7%
名護市	59,687	56,537	3,150	5.6%
糸満市	55,908	55,478	430	0.8%
沖縄市	126,276	123,372	2,904	2.4%
豊見城市	52,841	49,277	3,564	7.2%
うるま市	113,628	110,151	3,477	3.2%
宮古島市	53,434	54,587	-1,153	-2.1%
南城市	39,669	39,551	118	0.3%
国頭村	5,528	5,766	-238	-4.1%
大宜味村	3,355	3,385	-30	-0.9%
東村	1,845	1,930	-85	-4.4%
今帰仁村	9,498	9,313	185	2.0%
本部町	14,366	14,526	-160	-1.1%
恩納村	9,607	9,302	305	3.3%
宜野座村	5,054	4,810	244	5.1%
金武町	10,673	10,209	464	4.5%
伊江村	5,109	5,024	85	1.7%
読谷村	37,339	35,920	1,419	4.0%
嘉手納町	13,638	13,553	85	0.6%
北谷町	26,919	25,420	1,499	5.9%
北中城村	15,791	15,996	-205	-1.3%
中城村	15,870	14,898	972	6.5%
西原町	33,798	32,215	1,583	4.9%
与那原町	15,363	15,126	237	1.6%
南風原町	33,604	32,275	1,329	4.1%
渡嘉敷村	783	720	63	8.8%
座間味村	1,079	1,082	-3	-0.3%
粟国村	929	1,004	-75	-7.5%
渡名喜村	531	582	-51	-8.8%
南大東村	1,454	1,488	-34	-2.3%
北大東村	592	607	-15	-2.5%
伊平屋村	1,523	1,538	-15	-1.0%
伊是名村	1,626	1,961	-335	-17.1%
久米島町	9,160	9,696	-536	-5.5%
八重瀬町	25,205	24,774	431	1.7%
多良間村	1,370	1,332	38	2.9%
竹富町	4,180	3,676	504	13.7%
与那国町	1,790	1,849	-59	-3.2%

いずれも1月1日現在・沖縄県統計局。2001年は合併前の市町村の人口の総計。

宜味・今帰仁、そして離島の石垣島・西表島・竹富島・与論島・宮古島において、２００６年から２００９年にかけ、延べ３３名のＩターン移住者、行政担当者、観光協会職員、保健所職員、U ターン帰郷者、まちづくり担当者、移住者の相談役になっている地元住民など にインタビュー調査を実施した。また、移住者が集住する石垣島山原地区では、移住者分布マップを作成した。

まず、取材した移住者の年齢分布では、最高齢は７２歳、最年少は３５歳で、最も多かったのは４０歳代前半、次が５０歳代前半であった。また、移住した年では最も古くは１９７４年、最近では２００３年で、２０００年前後が比較的多い頃であった。したがって、今回調査対象とした世帯は、沖縄ブームというものとは必ずしも濃厚な関係があるとはいえないだろう。また現職としては宿泊業を主とする者が６名、木工・陶芸・版画などの作製に携わる者が７名、カフェやレストランのオーナー、商店を営む者が６名、後は観光業従事者で、今回の対象者に第一次産業従事者はいない。農林漁業を営む世帯を調査対象としなかったのは、かれらの移住動機が職業主導のため、本研究の主題である風景と愛着という観点が薄いと予め判断したからである。さらに、移住前の職業では、圧倒的に会社員が多く、その他としては医療従事者、無職であった。

なお、行政担当者、保健所職員、観光協会職員への聴き取りは、主として該当地域の年次変化や行政としての移住者対策の現状や、関連データの収集であった。また、まちづくり担当者や帰郷者、窓口としての地元住民への取材は、どのように移住者がみられているかという‘ホストとしてのまなざし’、移住者というストレンジャーとの関係性のあり方が主となった。

本研究はもちろん移住者へのインタビューが主体である。かれらの地域選択においてどのような愛着が介在しているか・生成しているかがテーマであり、そこにどのような共同性の相貌が実在するのか/しないのかを、内面化された風景から探ろうというものである。

まだ幾分仮説の域を脱してはいないが、暫定的な結論を列挙するなら、以下のようになる。

1. 今日観光ばかりでなく移住のブームを迎えている沖縄にあっては、旧来語られてきたような「田舎のゲマインシャフト的な共同体」への憧れという伝統的な‘田舎’言説は次第に希薄化しており、今日の移住者、特に沖縄移住者においては旧来型の共同性志向は希薄であり、「初めに共同性ありき」という志向とは言い難いものがある。しかし、その分地域選択・居住地選択における自発性の度合いは高く、その時自発的選択ゆえ、かえって地域に対するまなざしは強いものがある。
2. Ｉターンをめぐっては移住者においては共同性志向よりも視覚的風景を中心としたアメニティ・ムービングの志向が優越している。しかし、旧来の住民ばかりでなく移住者間においてもこの２つの志向は葛藤の原因ともなっており、景観などの地域財への意味づけやその配分・寡占が重要な問題となっている（この点は別の角度から、下記〔図書〕①において展開した）。
3. ‘場所’を語る上でのボキャブラリーにおいて、移住者からの視点と地元からの視点との相違が存在する。すなわち、風景的視点で‘場所’を語る場合と、風景を離脱した形で語る場合である。ただこうした相違は移住者-地元住民ばかりでなく、移住者間においても、移住動機形成過程に、職業的希望が優先したか居住地選択が優先したかで違いがみられる。この意味で、移住者とか地元とかと一概に括れない状況が今日の地域には存在する。したがって、こうした相違が共同性の措定と非措定につながっている可能性が看取できるのではないか。

ただ、「愛着-風景-共同性」というリンクはまだ完全に解明されたわけではない。五感の中で視覚は人間、特に近代社会の人間にとり最も優越する感覚であるが、風景を語る語彙はかなり貧困であることが、今回の調査でははからずも判明した。それは被調査者の語る能力・ボキャブラリーだけに還元できない。内面化された‘抑制’が存在するのである。人は風景という視覚的アメニティの要素を語ろうとするとき、規範的に抑制しやすいのである。

確かに、移住動機を語ろうとする時、病気療養や都市への不安といった剥奪的動機は理解されやすい。また、職業上の必要性も受け入れられやすい。しかし、「海の碧に惹かれて」とか「赤瓦の街並に感動して」といった動機の語彙は、地元住民にも都市に居てかれらを語る人間（マスコミなど）にも、‘フマジメ’なものと映ってしまうのである。それゆえ、この点をあらかじめ理解している移住者たちは、われわれ外部の者にはあえてそれを語らないふしがある。本研究は、移住・地域選択という行動に存在する居住地選好（residential preference）におけるアメニティ・ムービング的な要素の積極的位置づけを意図したものであるが、この要素が規範的抑制ゆえに語られないという、あえていえば逆説的結論を見出してしまった面も否定できないのである。

しかし、かれらの電脳空間での語りは往々にして饒舌である。ホームページ、ブログな

どでかれらは積極的に自己の移住を語り、生活を語り、地域を語る。映像でも文章でも‥‥。おそらくここには自発的な語りと他発的な語りとの相違が横たわっているのだろう。

本研究はいくつかの暫定的結論と逆接的結論を導きだしたが、依然として継続中である。調査において得られた語りの分析、かれらが語った風景の表象分析とをリンクさせながら続いている。今後は調査で得られたデータと、かれら自身の自発的語りとを、より緊密に連関させながら、分析を進めていきたいと考えている。

なお、調査に先立っての「移住者データベース」は１９９０年から始め現在も入力を続けている。このデータベースは移住関連の雑誌・書籍から得たものであるが、２０１０年３月の時点で約４０００世帯となっている。今後あわせてこれらのデータから、生年・性別・前職・現職（職業履歴も含め）・世帯構成・移住前の居住地・転居回数・移住を考えた年（年齢）・最初の移住の年（年齢）・現住地の居住期間・耕地の有無（面積）・住まいの所有形態・海外居住の経験・地域内での役職経験など、日本のＩターン移住者の基本的な属性を集計した。

また追記しておけば、石垣島山原地区で作成したマップであるが、ここは約３０世帯の移住者が集住する地区である。同様の地域は西表島などにも散在するが、なべて周囲や内地のマスコミなどからの反応は否定的なものである。今回の調査でも地元のマスコミばかりでなく、中央の新聞・テレビなどが「特異的なもの」というスタンスで報道したばかりか、移住者が集まることに対して明らかに否定的な語り口も多々あったという。この辺りに、ストレンジャーという存在を‘飼い慣らし’きれていない、かれらに戸惑っている現代日本人の意識の一端が現れているだろう。それは、本研究の主旨である愛着という感情の背後に、依然として無意識のうちに「共同性」が措定されているからだと考えられる。逆に言えば、「共同性を留保した愛着」「共同性を前提にしない愛着」というものをわれわれはまだパラダイムの中に取り込んでいないのである。

(2)近現代の流行歌の分析について

Ｉターン移住者へのインタビューと並んで、本研究におけるもう１つの柱は‘唄われる’場所と愛着である。‘唄う’という行為が有する独自性について見田は、「大衆芸術において、舞台芸能や大衆小説や映画やテレビ番組と流行歌が異なるのは、民衆が自らそれを口ずさみ、能動的に参与するという点にある。だから流行歌は時代の民衆の支配的な情緒ないし「気分」と濃密な関係にある（見田宗介、1967=1978、『近代日本の心情の歴史−流行歌の社会心理史』、講談社)。本研究ではこの視点に立ち、「時代の気分」の中で‘場所’への愛着の言説を分析した。データとしては、見田の書に加え、１９６５年以降は、金園社企画編集部編・２００５年・『昭和・平成 演歌ヒット曲集』(金園社)、菊池清麿・２００８年・『日本流行歌変遷史―歌謡曲の誕生からＪ・ポップの時代へ』(論創社）と、ネット上のデータベースを利用している。

〔雑誌論文〕①は‘場所’論の原点ともいうべき「故郷」への語りと唄いから、人間と空間との相互作用、特に空間が‘場所’へと変貌するにおいて「愛着」という感情がどのように生成し、どのように変質するかを探ったものである。この稿では戦前の流行歌や成田が分析した同郷会機関誌の言説（成田龍一、1998、『「故郷」という物語−都市空間の歴史学』、吉川弘文館）が主たる対象であるが、人間と空間との相互作用、特に空間が‘場所’へと変貌する過程の中でも特に、故郷から「故郷」へという抽象化・脱地域化というアイロニカルな変容が人に明確な表象としての「故郷」を定立させる点を重点的に論じている。

次の段階として、現在本研究は、戦後、主として１９８０年代までの流行歌の分析に移行している。この研究は引き続き「故郷」への唄いを中心に、２０１１年３月に上梓される稿にまとめられる予定であるが、一部先取りするなら、高度成長が一段落する１９７０年代に‘場所’へのまなざし・愛着の形が変質するのである。すなわち、単なる欲求＝規範の合一がもたらす単純な肯定にもとづく望郷から、怨嗟や呪詛を含む形での逆説的な望郷が誕生する。故郷は「帰りたい場所＝帰るべき場所」という幸福でノスタルジックな場所から、「帰りたい、しかし帰れない」というプロセスを経た後、「帰りたくない、しかし帰りたいと思わなければならない」という屈折した場所へと変貌するのである。

また同時に、この時代、新たな‘場所’が誕生する。それが「郊外」である。伝統的に、故郷は唄われてきた。また、「故郷」を（肯定的に）唄うために、都市が（否定的に）唄われてきた。しかし、７０年代に入って新たに見出された‘場所’、それが「郊外」であった。というか、郊外化は高度経済成長期の早い段階から進展していたにもかかわらず、「郊外」は長い間見出されていなかったのである。ここにもまた、‘場所’と愛着との関係性を示す新たなプロブレマティークが存在しているのである。

なお、この研究の第３段階では１９９０年代から今日に至る流行歌（特にＪ・ポップ）の分析を予定している。この２０年は日本の音楽の変貌期であると同時に、‘場所’への愛着の変貌期でもあった。端的に言えば、今

日流行歌の世界においては‘場所’は消失している。もともと演歌も必ずしも‘場所’を唄ったものばかりではなく、主題は男女の愛であり、商業的成功をみたのはほとんどがこの愛の形である。しかし、演歌においては‘場所’と慕情とは密接に結びついていた。だが今日、若者の唄う愛に‘場所’はない。

だがそれでも、一部に‘場所’へ固執するＪ・ポップがあるのも事実であり、また本研究のフィールドである沖縄には多くの‘場所’への唄いが存在する。すなわち、戦後、特に８０年代を境とする文化的変遷の中で、‘場所’が変貌し愛着の形もまた変わってきたのである。本研究の第３段階ではこの点を仔細にまとめ、最終的には３つのステージの研究を統合的にまとめたいと考えている。

以上が、本研究の成果であり、今後に向けた展望レビューである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 菅康弘、‘場所’への愛着-語り、唄う、固着と乖離-、『甲南大学紀要』文学編 156 号、査読無、2009、87-106 頁
② 菅康弘、よそ者であることを〈選択〉する-居住地選択と愛着の位相-、『甲南大学紀要』文学編 146 号、査読無、2007、1-20 頁

〔学会発表〕（計１件）
①菅康弘、場所への愛着—沖縄への移住の現状と移住動機の今日的様態、甲南大学社会学研究会、2009 年 12 月 8 日、甲南大学

〔図書〕（計２件）
① 菅康弘、地方都市の肖像—R.S.リンド／H.M.リンド『ミドゥルタウン』（1929）、井上俊・伊藤公雄編『都市的世界』、2008、75-84 頁、世界思想社
② 菅康弘、田舎暮らし—〈住〉を“選択”することの意味とは？、小川伸彦・山泰幸編著『現代文化の社会学 入門—テーマと出会う、問いを深める—』、2007、59-74 頁、ミネルヴァ書房

６．研究組織
(1)研究代表者
菅　康弘（SUGA YASUHIRO）
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：40226410

(2)研究分担者　→なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者　→なし
（　　）

研究者番号：